

新結核治療劑ニ就テ

(一九二三年及一九二四年報告)

G. Schröder.

(Zeitsch. f. Tuberkulose Bd. 42, Heft 4.)

東京市療養所 熊 谷 安 正 譯

此ノ二年間結核ノ特異的刺戟療法ハ再ビ非常ニ旺ニ各方面カラ論議サレタ。所謂特殊製劑ナルモノガ、特ニ外來治療ニ於テ廣ク應用サレテキル、ソレガ必ズシモ常ニ患者ノ幸福トナルカ如何カ。兎モ角、這般ノ製劑ニ一般ノ興味ガ昂マツテ來タノハ、蓋シ V. Hayek ヤ Ranke 等ガ年來唱ヘテキル結核病學ニ於ケル免疫生理學の方針ニ由來スルコトハ明カデアル。サテ今ヤ「ツベルクリン」製劑ヲ以テ達スル是等ノ所謂「ボシチベ」、アチルギー」ナルモノガ免疫的治癒ト云フコト、同意味デアルトノ見解ニ對シテ新シイ證明ガ成功サレタノデアルカ、ソレトモ、余ガ常ニ代表トナツテ說イテキル次ノ持論ガ正常デアルカ。——即チ余等ハ「ツベルクリン」過敏性ニ到達スルト云フコト、免疫ノ増進ナルモノトハ同一ノ意味デハナイト思フ。又余等ハ特異的刺戟劑ノ中ニ一ノ結核ヲ治セシムル藥劑ヲ認メズ、唯ダ精々、他ノ治療要約ノ補助法ト見ルノデアアル。前者ガ肯定サレタ場合ニ於テノミ、再ビ「ツベルクリン」謳歌者ノ樂觀ガ正當トナルワケデアルガ、遺憾ナガラ余ハコレヲ否定シナケレバナラナイ。所謂生物學的治癒ニ到達スルコトノ可能性ニ對スル新シイ有力ナル證明、同時ニ又特異的刺戟劑ノ力ヲ以テシタ結核ノ全治ト云フ事實ハ尙未ダ見ラレナイ。反之余等ノ年來ノ實驗的竝臨牀的觀察ニ基ク懷疑的立場ヲ是認スルト見ラルベキ報告ハ經驗豐富ナル病理學者、結核専門家及實地家ノ側ヨリ多數ニ發表サレテキル。例ヘバ病理學ノ耆宿 V. Baumgarten ハ次ノ如ク述ベテキル。「人間ノ結核ニ對シ「ツベルクリン」療法ガ役立ツト云フコトガ、今日多方面ヨリ認メラル、如クニ果シテ疑ナク經驗上確定サレタルカ如何ノ問

題ニ對シテハ余ハ一般病理學者トシテ又病理解剖學者トシテ關與スルコトヲ好マナイ、併シ余ハ次ノコトヲ發言スル義務ガアルカニ思フ。ソレハ「ツベルクリン」療法ノ最初ノ時代ヨリ余ハ特ニ周到ナル觀察及檢査ヲナシタニ拘ラズ結核病變ガ(特ニ肺ニ於テ)屢々マタ完全ニ治癒スルコトヲ見ズ、又重症型ガ輕症型ニ比シ格段ノ減退ヲ示ス如キ跡ヲモ見ナイ。結核ノ病理解剖學的所見ハ余ノ病理解剖作業ノ約五十年間ノ最初ヨリ最後迄全ク同一デアツタ」。Dürrハ曰ク、「ツベルクリン」ノ治效作用ニ就テノ結論的證明ハ臨牀的範圍ニ於テ簡單ニキメラルベキデナイ。カクノ如キ證明ハ今日迄「ツベルクリン」ヲ以テ治療サレタ患者ノ解剖ノ場合或ハ眼ノ届キ得ル結核病竈例ヘバ狼瘡、喉頭結核ノ如キヲ治療スル場合ニ於テ治癒ノ現象ヲ確メタデモナク、又反對ノ餘地ナキ統計ニヨリ確定サレタワケデモナイコトヲ明カニセザバナラナイ。結核ノ人工免疫及ビ結核ノ治癒ハ如何ナ「ツベルクリン」謳歌者モ吾人ヲ欺クコトハ出來ナイ、免疫ノ問題ニ於テ、「ツベルクリン」ニ嚮導役以上ノ役目ヲ負ハセルコトハ疑問デアル。

Jungmann ハ彼ノ意見ヲ綜合シテ「ツベルクリン」療法ノ成績ハ畢竟其他結核經過ニ就テノ統計ガ示ス所ノモノヨリ以上ヲ物語ルモノデナイト曰フ。眼科醫 Igerscheimer ハ眼結核ニ就テ、非特異的療法ヲ行ツタ十年間ト、特異的療法ヲ行ツタ十年間トヲ比較シタルニ、全ク限局サレタ結核デ「ツベルクリン」療法ニ最も好適ナル筈デアルニ拘ラズ其ノ治效成績ニ於テ差異ヲ見ルコトガ出來ナカツタ。Nöggerath 及ヨ Fockstein ハフライブルグノ兒童ノ結核死ハ過去四年間ニ劇減シタコトヲ確メタガ、併シソノ間別段「ツベルクリン」療法ガ行ハレタノデナク、唯榮養増進ヲ計リツ、一般療法ノ基本ニ則ツタノミデアル。余ハ既ニ屢々述ベタコトデアルガ余ノ何等刺戟療法ヲ行ハナカツタ頃ノ十年間ノ成績ヲ持來ツテ最近盛ニ之ヲ行ツテキル十年間ノ成績ニ比較スルノニ別段其頃ノ成績ガ惡カツタト云フ印象ヲ有タナイ。コノコトハ恰度 Igerscheimer ノ事實ト一致スル。我々ハマタヨク次ノ事實ヲ見テキル。「ツベルクリン」ヲ以テ人工的ニ無理ニ生ゼシメタ「アチルギー」ハ唯免疫ヲ與エナイバカリデナク、却ツテ害ヲナスコトスラアル。即病變ノ轉移ノ傾向ヲ促スコトデアル。余ハ寧ロ反應度ノ増進(「アチルギー」ノ増進)ノ場合ニ於テ、慎重ニ用ヒラレタ刺戟體ニ對スル順調ノ徵候ヲ見ルノデアル。一般狀態ガ佳良ニナリ、他覺的ニモ病竈狀況ガ下火ニナルコトガ認めラレル。コノ關係ニヨリ余等ハ「ツベルク

リン」劑ノ免疫治療の效果ニ就テハ吾人ハ Sahli 意見ヲ一ニスル。但シ斷ツテ置クガ余等ハ爾他ノ有效ナル結核治療法例ヘバ一般療法、光線療法、非特異性刺戟療法等ヲ皆同様ノ意味ニ於テ免疫治療ニ效果ヲ舉ゲルモノト見做スノデア。Sahli 曰ク、「多數ノ「ツベルクリン」治療家が出來ルダケ高度ノ「ツベルクリン」過敏性ヲ得ント欲スル如キハ之ハ誤ツタ觀念ニ囚ハレテキルモノデ、ツベルクリンニ鈍感ニナルニ拘ラズ患者ハ治ラナイ、却ツテ憎惡スルコトガアル」ト、之レ余ガ年來常ニ唱導スル所ト立場ヲ同ジウスルモノデア。Selzer ガ「ツベルクリン」過敏性ト「アレルギー」ヲ全然切離シ、「アレルギー」ノ語ヲ以テ唯慢性疾患ノ場合ノ免疫現象ヲ意味シヤウトスル考ハ蓋シ間違ツテキナイト思ハレル。

生活菌「ワクチン」ヲ以テ結核ニ對シ免疫セントスル努力ハ引續キ企テラレ新シキ境地ヲ進ンデキル、既ニ前回ノ年報ニ於テ余ハ Selzer ノ Vital Tuberkulin ニ就テ述ベタ、之ハ肉汁ヨリ生ヘタ結核菌若ヲ長時間ニ互リ即チ結核菌若ノ 1/1000 %ガ僅カニソノ造構ヲ保チ居ル程度迄磨碎シタモノデア。該菌體ヲ Selzer ハ犢牛ニ注射スルコトニヨリ潜伏感染ヲ生ゼシメタ而シテソレハ勿論免疫のニ作用スルモノデア。

Weber ハ Vital Tb. ハ「コホノ菌」エムルジオン」ニ優ル所ガナイト云フ。

其他コノ兩牛間ニ別ニ Vital Tb. ニ對スル追試ハ發表サレナカッタ。

Igerscheimer 及 Schlossberger ハ氏等ノ所謂通過株即チ「サブロフィチッシュ」ノ結核菌株ヲ動物通過ニヨリ Pathogen 病原性トナシタルモノヲ以テ前處置スルコトニヨリ該動物ハ人型菌ノ重感染ニ對シ比較的免疫ヲ得ルコトヲ認メタ。

有馬、太繩及青山三氏ハ「サポニン」ヲ含有シタル培養基ニ結核菌ヲ培養スルコトニヨリ、〇・一「ミリ」ヲ以テシテ「モルモット」及家兎ニ何等病原性ナキ菌株ヲ得タ、氏等ハコノ菌ヲ用ヒテ「モルモット」竝ニ家兎ヲ處置スルコトニヨリ強毒ナル菌ヲ以テスル結核感染ニ對シ有效ナル免疫性ヲ附與シタ、而シテ氏等ハコノ注射劑ヲ人間ノ結核ノ豫防及早期治療ニ應用セシコトヲ勸メテキル Calmett, Guérin 及 Weil ハ「グリセリン」、牛膽、馬鈴薯培養基ニ培養シテ無毒トナシタル結核

菌ヲ以テスル免疫試験ニ成功シ新シキ廣汎ナル報告ヲナシタ、コノ無毒注射劑ハ(B.C.G.)「アンチゲン」性ヲ有ツテキル、犢牛ニ對スル試験ハ非常ニ確實デ佛國デハコノ「ワクチン」ヲ以テ小兒ニ豫防接種ヲ始メテキル、Calmettハ亦馬ニ就テ殆ンド生活力ナキ菌、加熱菌、脫脂菌、沃度、「クロール」、或ハ「グリセリン」等ニテ前處置シタ菌、及最近ニ所謂膽汁結核菌ヲ用テ免疫試験ヲ行ツテキル。

スペインニ於テハフエランノ法ガ問題ニナル、ソレハ抗酸性結核菌ノ「ムタチオン」型ナルモノ即大腸菌様ノ桿菌トナリシカモ強ク抗體ヲ作ル性質ガ存シテキル菌株ヲ以テ良好ナル成績ヲ舉ゲ豫防竝ニ早期治療ノ方面ニ應用シテキル。此ノ成績ハ Chabàs 及 López ニヨリ確證サレタ。

獨逸ニ於ケル死滅結核菌ヲ以テスル免疫試験ニハ從來常ニ成績ヲ舉ゲナイ。シカシ尙種々方法ヲ變ヘテ反復コノ方面ノ努力ハ續ケラレツ、アル。

Langer ハ死結核菌ヨリ得タル Impfstoff ヲ以テ結核ニ罹リタルコトナキ「モルモット」ヲバ「ツベルクリン」過敏トスルコトヲ得タ、コノ Unstimmung ヲ以テ後來ノ感染ニ對スル明カナル防禦作用ト結ビツケタ、彼ハマタ乳兒ニ於テ人工的感作ヲ喚起スルヲ得、而シテ彼ハ此様ナ Impfstoff ヲ皮内ニ注射スルコトニヨリ強毒ナル結核感染ヲ防禦スルコトガ出來ルト信ジタ。

コノ成績ハ吾人ノ從前觀察セル死菌ノ免疫作用トハ背馳スルモノデアルカラ深キ追試ヲ必要トスル。

Dreyer ハ脫脂シタ結核菌ヲ應用シ而シテコレヲ以テ實驗的又臨牀的ニ治療作用ヲ達シ得ベキヲ信ジタ Thomson 及 Riviere ハコノ事實ヲ追試シ承認スルコトガ出來ナカッタ。

Fornet ハ Dreyer ノ「アンチゲン」ハ「フォルマリン」ト「アセトン」トヲ以テシ過度ニ煮沸セラル、カラ變化ガ強キニ過グルト信ジタ。ソシテ彼ハ「エンドワクチン」ヲ推獎シタガ、コレハ死菌ヨリ製シ經口的ニ與ヘルモノデアル、コノ「アンチゲン」ガ有效成分トシテ吸收サレルコトハ血清蛋白ノ曲線ノ恢復デ知レル。丸粒トシテ販賣セラル、緩徐ニ増量シ

テ三週間持長シ三乃至四週間隔ヲ置ク用法デアル。

特殊刺戟體ヲ經口のニ與ヘルト云フコトハコノ二年間ニ再ビ深ク試験ヲナサレソノ結果ハ吾人が從來カクノ如キコトハ無效デアルトナシタ見解ヲ訂正スルノ餘儀ナキニ至ラシメテキル。

Deycke ハ氏ノ M. Tb. R. ヲ經口のニ與ヘテ反應的有效ナルコトヲ確證シテキル。即十萬乃至千萬倍稀薄度ノモノヲ一—15 滴、階段的ニ緩徐ニ増進セシムル。

余モ亦同劑ヲ經口のニ試ミタル例數ヲ有スソノ場合慥ニ輕度ノ全身反應ヲ見テキル、コノコトニ就テハ追テ報告シヤウ。

Klotz ハ Deycke ノ觀察ヲ證明シタ即舊「ツベルクリン」牛疫「ツベルクリン」M. Tb. R. Hornet ノ「エンドワクチン」及膽汁ニ浮游セシメタル脫脂結核菌等ヲ經口のニ與ヘタル後血清蛋白曲線ガ皮下或ハ「バルクタートン」ニ應用シタル時ト同様ニ恢復スル事ヲ慥メタ。

「バルクダートン」ノ F 及 N ハ反應ヲ現ハサナイ。

Zickel ハ經口のニ與ヘタル「ツベルクリン」ノ作用ガ甚ダ不確デアルコトヲ見出シタ、大量ニ與ヘタ時ノミ組織ノ Wasser anreicherung ヲ生ズル (Meyer-Bisch. ノ陽性)。

結核「アンチダートン」 Scheitlin Taseh ハ錠劑トシテ販賣セラル、コレハ結核「トキシシン」及「アンチトキシシン」デアル、「ズルフォグアヤコール」酸ニヨリ、結合サレタル臟器劑ヲ含ンデキル、一錠ニ〇・〇二五瓦ノ有效物質ヲ含有ス、コレヲ一日半個或ハ一個ヨリ始メ一日量〇・五マデ増量スル、病竈及全身反應ハ觀察セラル Assmann 及 Gruber ハ療養院ニ於テノ追試ヲ獎勵シテキル。

特殊刺戟素ノ經皮膚應用ニ就テハコノ二年間ニ於テ非常ニ熱心ニ發見サレタボンドロフ氏法ハ賛否ノ意見ガアル。Gröde, Bartfeld, Schellenberg 等多クノ追試者ハ之ヲ大ニ危險ナリトシ而モソノ量ヲ測定スルコトノ不便ナルコトヲ以テ

反對スル、一方 Decker, Friesche, Simon 等ノ諸氏ハ大ニ推奨スル、皮膚、粘膜ノ結核、「ループス」、更ニ進ンデ腺、骨、及關節結核及小兒時代ニ於ケル腺病ノ場合ハ殊ニ有效デ且ツ使用ニ便利デアルト曰フ。

余ノ經驗ニヨレバ大人ノ肺結核ノ場合ニハ無條件ニ危險デアル、特ニ「ツベルクリン」ノ不確ノ計量ヲ以テ反對スル、ボン・ドロフノ Impmethod ハ Arneth ニヨリテ或意味ニ於テ修正セラレタ。全量ハ平行セル二十個ノ平行表層搔創長サ六厘間隔二耗ソノ切創ニ舊「ツベルクリン」三—四滴塗布スル、コノ Vollstos ンハビルケ弱陽性ノ時用ヒビルケ強陽性ノ時ハソノ「 $\frac{1}{10}$ — $\frac{1}{20}$ 」ヲ用ユル。過敏ナル患者ニ於テハ適度ニ全量ノ $\frac{1}{10}$ — $\frac{1}{20}$ ヲ行フ。

Löster ハ六個ノ水平、六個ノ鉛直切創ヲ約一厘ノ間隔デ行フ。

Stöltzner ハ接種ヲ常ニ同一場所ニ反復スル即二種ノ線狀の皮下注射ニヨリ免疫野ヲ表ハシソノ接種反應ガ次第ニ少クナル度合ヲ見ル、接種竈ノ減退ニヨリ結核病竈ノ治癒ヲ認ムル。

皮膚免疫野ノ代リニ經皮膚法ガ應用セラル。

依テ余ハ次ニ經皮の特殊刺激體療法ニ就テ述ベル。

ペトルシュキノ軟膏「エクテビン」ノ類ガソレデアル。

Ulrici 及 Kremer ハペトルシキ「リニメント」ヲ全然無效ナリトシ Pohl—Drasch ハ有效ナリトスル氏ニヨレバ解熱及解毒ノ影響アリト云フ。

「エクテビン」ニ就テ前同年报ニ於テ既ニ詳細觸レテ置イタガ爾後二年間ノ追試サレタ報告モ大體好評デアル、余自身モ自己ノ療養所ニ於テ殊ニ中等症及「アレルギー」弱度ノ患者ニ試ミ度々同劑ガ治癒作用ヲ助クル場合アルヲ經驗シタ。シカシ其ノ應用方法ニヨリテハ強キ全身竝病竈反應ヲ喚起スル、用量ノ慎重ヲ要スル。

殊ニ毎回ノ塗擦ノ時間の間隔ノ問題ガ大切デアル。大體前回ノ塗擦ニヨル皮膚ノ反應ガ消失スルヲ待ツベキデアル。「エクテビン」ノ賛成者ハ Corzolino, Stein, Neib. 等デアリ、Oswald, Schönfeld 及 Schellenberg 等ハ懷疑派デアリ殊

ニ病竈反應ノ危險ナルコトヲ云フ。Kinkelmann モ同様ノ理由デ外來患者ニ使用スルコトヲ戒メテキル。

Gottlieb 及 Heller ハ Ektob. 療法ヲ試ミタル三三人ノ兒童ニ就キ持續シテ血液検査ヲ行ヒ、赤血球ノ沈降速度ガヨリ緩徐ニナリ血液中「リバーゼ」生成ガ正常トナリ或ハソレヲ超ヘ、最初高カッタ「リバーゼ」價ガ正常ニ還ルコトハ血球沈降反應ノ緩徐ニナルコト、結付イタ場合結局一度高クナッタ血清蛋白價ノ遞減トナリ結核病變ノ治癒ヲ意味スル。

余ノ處ニテ Ektob. 應用患者ノ血流ヲ検査シタ所ニヨレバ經過良好ノ場合屢々「エオジン」ノ細胞增多及中性多核白血球増加ヲ見ル。Kornberg ノ Klinik デハ「エオジン・フィラー」ヲ伴ヘル淋巴球增多ノ場合ヲ順調トシテ限ルヤウデアアル特殊刺戟療法ノ際ノ血球像ノ意義ニ就テハ余ハ尙後ニ述ベヤウ。

Neumann ハ經皮「ツベルクリン」療法トシテ次ノ處方ヲ推奨スル。

處方 舊「ツベルクリン」〇・〇五 「テルペンチン」油 一〇・〇 「オリブ」油 一〇・〇 含水「ラノリン」

三〇・〇 軟膏ハ毎夜増量の塗擦。

從來、特殊刺戟法ヲ以テスル皮膚療法ニ就テソノ間違多キ用量ノ測定ノ不確ト云フコトヲ以テ非難サレテキル。シカシ Mayer 及 Böhm ハ舊「ツベルクリン」ノ皮下注射ノ如キモ用量ノ確カサハ保證ノ限リデナイ、個々ノ「ツベルクリン」ノ效力ノ度合ニ於テ既ニ非常ニ變動ガアルト曰フ。

Tönnesen ノ Tebeptin ニ就テハ前回報ジタガ、コレハ結核菌ヨリ得タル蛋白體デ曹達液ニヨリ溶ケル從テ精確ニ定量スルコトガ出來ル、而シテ之ハ結核毒素ヲ含ンデ居ナイ Tönnesen ニヨレバコノ蛋白體ハ「ツベルクリン」製劑ニモ又ハ Much ノ「バルチゲン」A 中ニモ可溶性ノ形トシテ含マレテキナイ。

余ハ Tebeptin ヲ氏ノ好意ニヨリ診斷用又治療用トシテ數回從憑セラレ多數ノ患者ニ試ミテ氏ノ觀察ヲ確ムルコトガ出來タガ、診斷用トシテハ「ツベルクリン」同様危險デナイト云ヘナイ。

大體ニ於テ余ノ實驗ヲ綜合スレバ Tebeptin ハ治療ニ應用スル場合精確ニ分量ヲ測リ得ル點ガ長所デアラウ、シカシソ

ノ結核人體ニ對スル作用從來用ヒラレタ「ツベルクリン」劑ト本質的ニ異ル所ガナイ。從テ他ノ「ツベルクリン」製劑ヲ用ヒテ治療スル場合ニ見ラル、患者ノ危險ハコ、ニモ同様ニ見ラル、ガ故ニ、ナルベクタゞ増殖性結核ノモノニコレヲ用ヒ、シカモ用量ヲ慎重ニ測ルコトデアル。「Tonnesen」氏ハ規則トシテ〇・〇〇一牒ヨリ始メルガ余ハ〇・〇〇〇一牒ヨリ始メル。ソシテ〇・〇〇五デ止メル。

Lyttin ハ余ノ考ヲ承認シタ、彼モ舊「ツベルクリン」ノ場合ト何等異リタル作用ヲ認メズ又危險ノ度モ同様デアルト云フ。

Verdina ハ結核性滲出液ノ場合ノ療法ヲ以テ著效ヲ見テキルガ余ノ考ニヨレバ氏ハ過量ヲ用キテキルヤウデアル。

Claus Schilling ハ人型結核菌ノ水浸液ヲ Ertubin ト名ケタ。此ノ考ニヨレバ之モ Tubeprotein ニ類スルモノデアアル、余ハ最近若干例ノ患者ニ就キ實驗シタ、無熱ノ純増殖性ノモノニ應用シタノダガ少量ニシテ既ニ全身竝ニ病竈反應ヲ見ルモノ數回、増惡セシメタルモノニ例、咯血シタルモノ一例アツタ。

故ニ余等ハ初量ハ〇・〇〇一瓦トシ大體舊「ツベルクリン」ト同様ニ緩徐ニ増量スル。シカシ舊「ツベルクリン」ニ比ベテドレダケノ優レタ點ガアルカ認ムルコトガ出來ナイ。

Jesionek ハ若イ肉汁培養菌ノ菌ヲ去ツタ液ヲバ「エクトツベルクリン」ト名ケ治療上ニ皮膚結核ノ場合ニ有望デアアル。菌苔ヲ蒸發シタモノヲ「エンドツベルクリン」ト稱シ之ハ病竈ノ周圍ニ反應ヲ喚起スルニ適スルト云フ。

Macrell ハ Wchinsky ノ「ツベルクロムチン」ヲ有熱患者ニ試用シ、原著ノ注意書ヨリモ大量ヲ用ヒテキル。彼ハコノ製劑ノ長所ハ比較的大量ヲ以テ速カニ進ミ得ルコトデアル。

Bumba ハ v. Hayek ノ免疫生物ノ原則ニ從テ喉頭結核ノ療法ニ推奨シテキル Varneck ハ Deycke Much ノ「バルチゲン」ヲ以テ腺結核、痔瘻、眼結核ニ好成績ヲ擧ゲテキル Fischer ハ「ツベルクリン」注射後ノ全身反應ヲ「ツベルクリン」ニ當該患者ノ血液及血清ヲ混加スルコトニヨリ避ケヤウトスル。氏ハ「ツベルクリン」一牒ヲバ血清〇・一牒ニ混ジタルモ

ノヲ以テ始メ八日間ノ間隔ヲ以テ増進的ニ皮下ニ極量ニ達シテモ甚ダ稀ニシカ病竈反應ヲ見ナイ。

非特殊刺戟療法ノ下ニ兩年間ニ多クノ人々ニヨリ結核療法ニ應用サレ屢々歡迎サレテキル其中 Much ノ研究ニ基キ「リポイド」ガ重要ノ位置ヲ占メテキル。

Gammelan、Fett, Lipoid, Wachs ノ結合ヲ以テ動物實驗竝ニ臨牀的ニ良成績ヲ擧ゲテキル、ソレハ皮下注射或ハ「リニメント」トシテ經皮的ニ與ヘル、強度ノ「リンフォチトーゼ」及「エオジノフィリー」ヲ得タ。

Haim 及 Inset ハ A.T. 及 Parigen 殊ニ中性脂肪成分ニ乾燥セシメタル人腦ノ「エーテル」抽出物ヲ以テ結ビツケルコトニヨリ反應度ヲ高メル。

コノ「リポイド」ノ刺戟増加作用ハ使用ノ前ニコノ混合物ヲ日光光線又ハ「レントゲン」線ノ照射ニヨリ尙ホ強メルコトガ出來ル。

筋肉内ニ與エタル「コレステリン」(〇・〇五ヲ二・五厘ノ油ニ入レ且ツ「クロレトシ」ノ少量ヲ加ヘタルモノ)ハ Berson ニヨレバ肺結核ノ場合對症的ニ順調ニ作用シ血液像モヨクナリ血中ノ「コレステリン」、スビーゲル「ヲ高メルト云フ。

Much 及 Brüncke ハ結核兒童ハ「レチ、ン」ノ皮内注射ニヨリ明カナル扁平疹ヲ作ル(ムッフノ「アンチリポイド」ノ存在ノタメ)。

コノ「レチ、ン」注射ハ三期結核ノ免疫狀態ノ低下セルモノニモ成績ヲ期待スル。

Kisch ハ衰ヘタル結核患者ニ「ヘモフロチン」ヲ靜脈内ニ與ヘタ、コノ製劑ハ Gans ニヨリ製セラル、山羊、牛、馬及ビ豚等ノ血液ヨリ製スト云フ、作用ノ強サハ山羊ヨリノモノ一番低ク豚ヨリノモノガ最も高イ、其ノ最も弱キモノヨリ始ム、害作用ハナイ、ノミナラズ體重ノ増加殊ニ腸結核ノ下痢ニ奏效スルト云フ。Kretschmer ハコレヲ追試シテ良成績ヲ得テキル、コノ治療法モ非特殊ノ刺戟療法ニ算ヘラルベキデアル。

Much ノ (Mucalin) ハ蛋白質體、「リポイド」及ビ動物性脂肪ノ混合デアルガ Schrandigel ハ之ヲ葡萄膜結核ニ用ヒテ好成績

ヲ得タ。即チ「ツベルクリン」療法ニ於ケル注射ノ間ニ三回乃至十回筋肉注射一回(二・五糧)ヲハサムノデアル。
 「Kartumkel」ハ根形桿菌「ウルツェルバチレン」屬ノ「サブロフィテン」ヨリ一種ノ非特殊性「ワクチン」ヲ製シタ、コレハ特
 ニ小兒結核ニ有效デアルト云フ、四白金耳培養ヲ四坵ノ液ニ浮遊セシメタモノガ濃厚液デコレデ〇・一乃至〇・三注射ス
 ル、十倍乃至百倍稀薄液ヲ〇・二乃至〇・八ヨリ始メル。

Sorgo 及 Weidinger ハ蛋白分解産物ノ「フオロゲタン」——初量〇・二、漸次増量——ヲ用ヒテ腺結核及ビ滲出液ニ有效
 ナル成績ヲ見タガ肺結核デハ病竈竝ニ全身反應ガアツテ效果ガナカツタ。

「ヤトレン」モ有效ナル非特殊刺戟體ノ一トシテ肺結核ニモ應用セラル。

Schittenhelm ニヨレバ同劑ハ最初細胞毒トシテ働キ然ル後治癒作用ガ始マル。Rüschel ニヨレバ外科結核ニ用ヒテ全身
 竝ニ局所ニ治效アリト云フ。用量一週二回、四%液二坵皮下注射、病竈ガ適當ナル場所ニアレバ其局所ニ直接用ユ、瘻
 管ナラバ一週二回ノ注入ヲ行ヒ潰瘍ナラバ「ヤトレンガーゼ」ヲ被フテ置ク。

Brüncke ニ反對ニ、結核性ノ臓器疾患ニ對スル石鹼ノ皮膚應用ヲモ、余ハ非特殊刺戟療法ニ算ヘル、石鹼療法中最近特
 ニ歡迎サル、モノハ Heinz ノ「テルペストロール」デアル(一〇%「テルペンチン」油ヲ含ンダ、「カリナトロン」石鹼ノ一
 種)、余ハコレヲ用ヒテ屢々奏效ヲ見タ。Platz モ之ヲ推賞シテキル。

Kunick ノ推賞スル「イサポゲン」ハ「ヨード、カンフェル」石鹼(「ヨード」各六%)デ特ニ乾、濕肋膜炎ニ奏效スルト。

使用ニ便ナル石鹼トシテ余ハ「ベルクタン」ヲ推賞スル、コレハ硅酸、石鹼、「カンフェル」、「ペルバルサム」及「アル
 コール」ヨリ成ル。

Bathory ハ次ノ混合物ヲ塗擦料トシテ應用シテキル。

處方

「カリ」石鹼 一五・〇〇
 「ワゼリン」 一五・〇〇

炭酸「カリ」 〇・五

「クレオソート」 〇・五

「テルペンチン」油

三・〇

「カンフル」

三・〇

結核ニ用キラル、非特異性刺激體ハ、カクノ如ク數多イガ、ソノ作用ハ一般ニ何レモ同様デ順調ノ場合ニ於テハ當該個體ニ適合シソノ治癒作用ノ補助トナルデアラウ。(未完)